

■ 巻頭言 ■

象牙の塔

京都大学工学研究科、陰山 洋

最近、ネイチャー誌の Editorials (Nature 2014, 514, 273) に掲載された「University Challenged」というタイトルの文章を読んだ。これによると、1000年以上の間、大学では教員と学生が同じ時間と空間を過ごすことにより、既存の知識を学ぶことと（教育）、新しい知識を獲得すること（研究）の両方が可能であった。つまり、教育（知の継承）と研究（知の創造）のシナジー効果は自然と形成されていたが、大学が大学足りえてきたはずのこの土台が、近年、加速度的に変化する世界の流れにのまれて破壊される危機的な状況らしい。大きな変化の一つとして挙げられているのが、学生数の増加、学生の質の多様化である。一世紀前の大学教育は、主に上流階級の限られた数の人々に対して提供されていたが、現在は一般の人々（発展途上国を含む）に対して開かれている。次いで、教育や研究の提供手法もインターネットの普及により劇的に変わりつつあることに触れられている。例えば、MOOCs（大規模オープンオンライン講座）は今後もっと普及していくと予想されている。米国の知人は、オンラインで海外出張先から自分の大学の講義をできるから助かるといっていた。日本の大学では、今後人口が減少していくこともあり、否応無しに大きな変革を迫られている。京都大学でも、日本人以外の教員と留学生の割合を増やす計画が進められているところである。

さらにこのEditorialの筆者は、避けられない変化として「人間がもつ好奇心や知識への飢えは、もはや大学の主たる存在理由にはならない」と続けている。つまり、経済の発展に貢献するのが今後の大学の存在意義であるゆえ、大学はproblem-orientedな研究を行い、科学者は起業家を目指すべきであり、大学への投資は、利益がでることを優先するべきであると。確かに、我が国でも、ここ10年でこのような考え方が浸透しているように見える。しかし、本当にこれでいいのだろうか。学生をおだてて育てると確かに研究はよくやるので、“役に立つ”成果は早くでるかもしれないが、それで知の継承、知の創造といえるのか。ニュートンは自身を「巨人の肩の上にいる矮人」と表現したが、このような謙虚な姿勢はもう不要であろうか。先日、この三月に退職される先生（某分野で世界のリーダー）を訪ねたときに、「これまで、お弟子さんには言葉ではなく、背中を見せてきた」とおっしゃった。私より二回りくらい上の大先生にはこのタイプが多かったように思う。今こそ、敢えて象牙の塔を地でいくのもいいのではないか。知の継承と創造はそもそも簡単なことではなく、途方も無い時間と忍耐が必要なことなのだから。

著者紹介

陰山 洋（かげやま ひろし）

京都大学・教授

略歴：平成10年 京都大学大学院理学研究科化学専攻博士後期課程修了

平成10年 東京大学物性研究所助手

平成15年 京都大学大学院理学研究科化学専攻助教授、のちに准教授

平成22年 京都大学工学研究科物質エネルギー化学専攻教授、現在に至る

現在の研究分野/テーマ：無機固体化学、新物質合成と機能性の開拓、最近は、特に混合アニオン化合物に興味がある。

